マレーシア華人新村の形成過程と地方政治
―スレンバン近郊の2新村における現地調査から―

坪井祐司・村井寛志

キーワード：マレーシア（Malaysia），華人（ethnic Chinese, Malaysian Chinese），新村（new village），地方政治（local politics），スレンバン（Seremban），（ヌグリスンビラン（Negeri Sembilan）

0. はじめに

本稿は，2007～2010年にかけて行われた著者（村井，坪井）と東條哲郎の3人が共同で行った，マレーシア・ヌグリスンビラン州，スランゴール州の計14の華人新村（以下「新村」）の形成過程に関する聞取り調査の成果の一部である。本稿では特に，ヌグリスンビラン州スレンバン市周辺地域における華人新村の形成過程を取り上げる。

「新村」とは，1949～50年代のマラヤにおいて，地方部の華人住民の強制的な集住により形成された集落である。1948年のマラヤ共産党の武装蜂起に際して，イギリスは「非常事態（Emergency）」を宣言して鎮圧に乗り出した。山間部でゲリラ活動を続けるマラヤ共産党には華人が多かったため，イギリス当局はこれに対する食糧・物資の供給源を絶つべく，地方部における華人を強制的に集住させて管理しようとした。この集住のために作られたのが新村で，1954年までにマラヤ全域に480の新村が形成され，約57万3千人が移住させられた。その後，マラヤ共産党の勢力減退，1957年のマラヤ連邦独立を経て，60年には正式に非常事態の解除が宣告されるが，多くの住民はその後も新村に住み続け，54年時点で480だった新村のうち，2002年の段階でも450が残存している［林・方2005］。つまり，新村は今日まで続くマレーシアの地方部における華人集落の一つの原型と言える。

新村に関する先行研究としては，80年代には特定の新村や地域に焦点をあてた事例研究として，ヌグリスンビラン州ジュレブ郡の新村を扱ったSiaw［1983］，ペラ州を扱ったLoh［1988］が出た。2000年代以降，マレーシア全体の華人新村について概括的なデータを紹介した著作も登場している［林・宋2000，林・方2005］[1]。

一方で，個々の事例を比較検討して地域的特徴を明らかにする作業は十分に行われていない[2]。個別地域の特性を明らかにするためには，歴史的展開が比較的似通った幾つかの新村をグルーピングし，それぞれの村落史を再構成する方法が有効と思われる。その第一歩として，本稿では，ヌグリスンビラン州スレンバン郡ラサ新村（Rasah，亜沙）およびシカマット新村（Sikamat，小甘密）の事例を取り上げる。ヌグリスンビラン州は半島部マレーシア西岸部に位置し，スレンバンはその州都である。ラサはスレンバン中心から南に5km，シカマットは北東に5kmほどの距離で，スレンバン市に近接している。

この2村は，マラヤのなかでも最初期に形成された新村である。新村がマラヤ全域に展開されたのは1950年5月に立案されたブリッグス計画（Briggs Plan）によるが，この2村はそれに先立つ49年に設置されている。2村とも母体となる集落を持たず，新村建設によって初めて村として成立した[3]。つま

りこの2村は，イギリス当局が明確な方針を定める前に成立しており，その成立過程には，新村建設をめぐる試行錯誤が表れている。

つまりこの2つの新村は，大都市近郊の新村であること，ならびに最初期に形成された新村であることという二点において特徴を持つ。本稿ではこうした視点からこの2村の村落形成史を再構成する。

依拠するデータは，当該村落における村長（元村長）や当時の事情を知る1920～30年代生まれの老人に対する聞取り[4]，そこで得られた地方出版物，マレーシア国立文書館所蔵の行政文書や華社研究中心，星洲日報社，南洋商報社で閲覧した新聞記事等である。

1. 新村成立以前

本節では，ラサ，シカマットの2新村の成立の経緯を整理する。以下ではまず，その前提として，新村成立以前のこの地域の状況を見ておく。

新村建設以前のマラヤ地方部では，スクウォッター（Squatters）と呼ばれる人々が広範に存在していた。スクウォッターとは，法的な権利を持たずに土地を占有，使用する住民のことであり，この時期のマラヤでは都市やゴム・プランテーションの近くで農業に従事していた華人を指すことが多い。第二次大戦中の日本の軍事占領による都市部から郊外への退避や，占領下の食料不足，ゴム・プランテーションの経営停止により，占有権を持たない土地を耕作する華人スクウォッターが増加していた。聞取りにおいても，日本占領下，管理者のいなくなった土地でキャッサバなどの食料生産を行い，飢えをしのいだという話は，かなり一般的に聞かれた。大戦後のスクウォッター問題は新村建設の要因の一つと言える。

シカマット地域に関してはやや特殊な事情がある。シカマット地域はもともと錫の鉱床地域であったが，大戦前の段階で農業地域へと転化していた。錫が枯渇すると，イギリスはこの地域の開発のため土地への権利を与えて華人の定住を促したのである。これは現在の王成就（Wang Seng Chou）村付近であった［小甘密新村五十周年紀年特刊 : 57］。聞取りからも，当局が土地を華人向けに農業用地として貸与していたことがわかる。土地は2エーカーが1区画であり，地代は2元（聞取りママ）であった。シカマット地域には当初40世帯あまりが定住し，野菜栽培に従事した。借りた土地では何を栽培してもよかったが，農業以外には転用不可の条件であった［聞取りSK2］。

つまり，大戦前のこの地域の華人による野菜栽培はイギリス当局公認のものであり，非合法の意味合いがある「スクウォッター」とはいささか状況が異なる。新村形成後も，シカマットでは職業が農業経営に分類される者が格段に多く，こうした傾向が引き継がれたものと思われる。とはいえ，大戦中の日本軍の占領下では土地行政が機能せず，土地の使用面積の制限はなくなり，空き地があれば地代なしに自由に耕作できる状況だったという［同前］。結果として，この地域でもスクウォッター的な状況が出現していたと思われる。

2. 新村形成をめぐる政治過程

次に，スクウォッターに対する拘留から，新村成立までの経緯について述べる。

ヌグリスンビラン州の都市部では1948年6月より左派勢力に対する取り締まりが強化され，同年6月20日，労働団体やその他左派系団体の関係者約40人が逮捕された（マレー人2名，インド人3名以外は全て華人）。翌1949年1月末にイギリス軍・警察当局がスレンバンの北郊のウル・トゥミアン（Ulu Temiang，烏魯沈香）で住民に対する包囲作戦二度に渡って行い，約500人の華人が拘留，家屋800軒が燃やされた［華僑問題研究会編 1950：220, 222, 239］。同様の掃討作戦はシカマット地域のスクウォ

ッター居住地域においても行われ，この結果，あわせて約 1,500 人の華人が拘留された［星洲日報 1999.07.23］。

この時期，当局は左派系と思われる華人の中国への強制送還を行っていて，スレンバンにおいても拘留した華人抑留者を中国に送り返そうとしていたようだが，陳世英，張坤清，許聯振らスレンバン在住の華人の有力者が州首相などと交渉した結果，彼／彼女らは釈放された［王著・黎編 2002：先賢伝略］。逮捕や国外退去を免れた華人の集住地として形成されたのが「自由新村」であり，ラサ新村の前身である。

ラサに集住させられたのは，作戦が行われたスレンバン市の北に位置するシカマット，トゥミアン，パンタイ（Pantai），市の南に位置するマンバウ（Mambau）などに住んでいた華人であった。当時の彼らの主な生業は養豚，野菜栽培であった。新村の土地はもともと日本人所有のエステートであったが，イギリス政庁が徴用，もしくは買収して新村建設に当てた［聞取り RS1］。ラサの新村成立時の人口は 357 世帯，1,910 人であり，そのすべては華人であった（表）。元の位置はリンギ（Linggi）川沿いの低地にあったが，「新村」とはいっても実態は長屋の集合住宅から成る仮の収容所に過ぎず［聞取り RS1］，1951 年に水害が起こったため高台にある現在の位置へと移転した［星洲日報 1999.07.23］。

シカマットもまた，ラサと同様，49 年初頭の掃討作戦で拘留された華人の再定住先として成立した。49 年に実質的に成立し，翌 50 年に公認を受けた。新村としてはラサに次いで古いという［聞取り SK1］。シカマット成立過程については行政文書からも追うことができる。1949 年 12 月，当局側の行政官とスクウォッターの代表者 10 名程度が参加してシカマット・ロード・スクウォッター委員会（Sikamat Road Squatter Committee）が開かれた。49 年 12 月と 50 年 1 月の会合では，一時的土地占有権の付与や学校の建設などが討議された。そして，50 年 7 月の会合の際にスクウォッターの移住計画が提示された。そこでは，スレンバン郡長官がゲリラから守るために柵で囲われ警察署も併設された定住地を与えることを説明し，スクウォッター代表者側も了承した［SCA NS 76/51］。この結果，シカマットの新村が成立したのである。

この 2 村について共通して言えるのは，州都スレンバンの近さ故，真っ先に掃討作戦の対象となった一方で，スレンバンの有力者が救済措置に奔走したことが新村成立のきっかけとなっているという点だ。こうしたスレンバン有力者たちの動向は，49 年 2 月に結成されたばかりの，穏健派で，イギリス当局に妥協的な華人組織・政党のマラヤ華人協会（Malayan Chinese Association, MCA，馬華公会）[5] へと合流して行く。

イギリス当局と交渉した 3 人の有力者の内，張坤清（Choon Ah Koon）は 1919 年にシンガポールのラッフルズ医学院を卒業した医師で，1922 年以来公立のスレンバン中央医院に勤務し（34 年以降院長），現地採用医療官に任じられていた。1946 年に退職していたため，49 年初頭時点では単なる地方名士であったが，その後ヌグリスンビラン MCA 主席となり，彼と協力して動いていた陳世英も MCA 本部の労働者部門（「工人局」）主任となった［王著・黎編 2002：先賢伝略］。

MCA の成長に伴い，新村に対する MCA の関与も大きくなったものと思われる。ラサの前身である「自由新村」は，水害による移転の当初，「馬華新村」（「馬華」は MCA の華語名「馬華公会」の略称）と改名した［星洲日報 2004.02.23］。また，同新村における華語小学校は「馬華小学」と名付けられている。

前節および本節で述べた 2 村の形成過程から，以下のようなまとめが可能であろう。後にラサ，シカマットの 2 村ができる地域では，大戦前から野菜栽培など都市近郊的な農業が発達していたが，日本占領下の混乱によりスクウォッターが増加していた。スレンバン及びその周辺部における左派勢力掃討作戦の際には，早期に華人の拘留が行われた。これはイギリス当局も明確な新村建設のプランを打ち出す以前のことで，スレンバン華人有力者の奔走により中国への強制送還は取りやめになるが，直後に作ら

れた「自由新村」は一時的な収容所といった性質が強かった。水害によって短期間の内に村ごと移転することになったことは，「自由新村」が恒久的な定住に堪えるものではなかったことを示している。一方，この間にスレンバン華人有力者を取り込みつつ勢力を拡大した穏健派 MCA は，新村とも関わりを強めつつあった。

3. 非常事態時期の生活

この節では，新村への移住から，非常事態時期の住民の日常生活について見ていく。

前節で述べた建設の経緯もあって，新村への住民の移住は厳しい環境の下で行われた。ラサでは，政庁は土地を提供したが，家は用意されず，彼らは自らヤシを葺いて家を建てた［聞取り RS1］。1952 年にラサの華人 5 人が出した陳情書によれば，政庁は 1 軒あたり家の建築費用として 200（マラヤ）ドルの補助を出しているが，建築資材の価格からみてそれでは不十分であった。陳情では，その後 6 カ月間支給される予定の生活手当（subsistance allowance）を一括して支払うよう要請している［SCRO NS A/2/L 1951&52］。聞き取りでも，ラサでは移住に際して 1 人 300 ドルの援助があったという［聞取り RS3］。

シカマットにおける聞取りでは，移住はイギリス軍に強制されたものであり，住民たちは元の家を解体して建材を運搬して家を建てなくてはならなかった。移住先の場所は抽選で指定された。当時付近にマレー人，インド人の住民もいたが，彼らは集住させられることはなく，華人のみが新村を形成した［聞取り SK2］[6]。

移住後の新村における生活にも大きな制限があった。村は鉄条網に囲われており，出入り口では検問があり，夜間の外出は禁止された。検問では食糧を携帯していないか，持ち物が検査された。ラサでは，米は配給制で，配給券（「米牌」）を通して支給された。シカマットでは，米ばかりでなく，塩，油なども政府指定の店で購入する必要があった。1 ヶ月分の量が決められており，帳簿で記録されていた［聞取り SK2，SK3，RS1］[7]。

夜間は警官による巡回が行われていた。シカマットでは，12 人の警官がおり，巡回が住民の名前を 1 人 1 人確認していた。一番厳重だったときには夜 6 時から朝 6 時までに 3 回，4 時間に 1 度の見回りが来たという［聞取り SK2］。当局による警備だけではなく，村民による自警団（Home Guard）も組織された。シカマットでは，50 年代に自警団ができた。自警団は，村の若者のなかから抽選で集められて結成された［聞取り SK2］。

ラサでは，こうした厳重な行動制限は 1960 年の非常事態の解除とともに終わった。しかし，1960 年代初期に村から 20 名余りの若者がマラヤ共産党に参加しており，その後も左派勢力への支持者が存在したことを窺わせる［聞取り RS1］。また，シカマットは非常事態期以降も「黒区」（共産党の活動区域）であり，1985 年に「白区」（当局が鎮圧した地域）となるまでは村から出る際に身分証が必要だった［聞取り SK2］[8]。軍事的が緊張は 50 年代で終了した後も政治的な緊張状態はしばらく続いていたことがうかがえる。

なお，新村住民の生業については表に挙げた。シカマットが農業中心であるのが特徴的だが，これは大戦前から野菜栽培が行われていたことによるものであろう。ラサでは周辺にエステートが多かったため，ゴム採取が主となっている。非常事態時期においても昼間の外出は認められており，住民の生業に一定の連続性があったと考えられる。

本節では，非常事態時期の 2 新村での住民生活が厳しく管理され，かつ，その状態が独立後もしばらく続いていたことを見てきた。裏返せば，2 村は当局の準備も整っていない早期に建設された新村だが，それだけに，住民も不満が高かったということの表れではないだろうか。次節で見る，50 年代の

村落内政治の流動性の背景として念頭に入れておきたい。

4. 1950 年代における村落行政

前節で見たように，1950 年代の 2 村の住民は厳しい管理の下に置かれたが，選挙による自治も導入された。こうした制度化により，それまで行政とは縁遠かった華人住民の社会が，初めて行政の末端に組み込まれた。本節では同時期の村落内政治について見ていく。

マラヤでは 1952 年に地方評議会条例（Local Council Ordinance）が制定され，登記された村に関しては評議会（委員会）を組織することができるようになった[9]。村によっては村落委員会の選挙がおこなわれ，その主席が村長を兼ねる体制が整えられた。ラサ，シカマットでも選挙を通じた村長の任命が行われた。

ラサでは 1954 年から 99 年までに 12 代の村長が務めたが，このうち 6 代が 1962 年までに交代し，61 年に就任した第 6 代村長までは選挙で選ばれていた［星洲日報 1999.08.09］。当時字を読める人は 10％程度しかいなかったが，選挙では字が読めない人も手を挙げたりして投票していたという［聞取り RS1］。

シカマットでも，初代から第 3 代までの村長は選挙で選ばれていた。1953 年 8 月に行われた村落委員会の選挙については行政文書から詳細を確認できる。この時，有権者は 21 歳以上で居住歴 1 ヵ月以上の住民 320 名であった[10]。立候補者は 48 名であったが，特殊部門（Special Branch）による候補者の審査により 3 人が失格となるなどして，最終候補は 13 人であった。投票は 3 区にわけて行われ，投票総数は 190 であった。投票用紙には候補者名（漢字表記）とともにそれぞれの候補者のシンボルマーク（杖，時計，茶碗などの絵）が記載されており，文字の読めない住民も投票できるようになっていた。

当選者は上位 8 名であった。選挙の当選者 8 名にくわえて，25 人のインド人住民からインド人の委員が別個に選出され，委員は合計 9 名であった。新委員の投票により，9 票中 4 票を集めた周方（Chou Fong）が第 2 代委員長（村長）として選ばれた［SCA NS 76/51］。周はイギリス政府との関係が近く，対立する人物を共産主義者として当局に通報したりしたため，村民にとっては恐怖の対象だったという［聞取り SK1］[11]。

翌 54 年 12 月にも選挙がおこなわれた。候補者 16 名中当選者は 7 名であり，「名誉書記」1 名，インド人委員 1 名を加えた 9 名で委員会が組織された。結果，53 年に続いてトップ当選した尹兆光（Wan Siew Kong）が第 3 代村長となった。彼は村を構成する広東人・客家人の双方から信望を集めていたと報告されている［SCA NS 76/51］。彼は鶏肉の売買をしていたため村外に出ることが多く，知己が多かったという［聞取り SK1］。

50 年代末～ 60 年代初頭にかけて，議会制容認の左派政党連合である社会主義戦線（SF）が，特に地方評議会レベルの選挙で躍進すると，この地域も大きな影響を受ける。ラサでも 1960 年の選挙では SF に加入したマラヤ労働党が勝利し，村名を MCA 色の強い「馬華」新村から現在の「ラサ」へと改名した［星洲日報 1992.06.22］。この時期は，MCA が党内分裂により勢力を減退していた時期と重なる。ラサ新村成立の際に奔走したスレンバン有力者の陳世英も MCA を脱退し，スレンバン市議会の多数勢力を形成していた（1962 年統一民主党＝ UDP 結成）［謝 2010］。

しかし，これに対する反動として 1962 年には州レベル以下の地方評議会の選挙制の廃止が提起され，65 年に正式決定されると［Nyce 1973：141］，以後村長職は州政府の委任になった。村長委任制が導入されたことで，村落内政治における MCA の地位は制度的に保障されることとなった。62 年以降，村長の人事は MCA の推薦によって決まることになり，2 村ともに，1968 年前後に MCA の支部が設立されている［聞取り SK1，RS1］。同時期に政府による新村の開発支援も始まることから，こうした動きの背

後には政府がついていることが窺われる。シカマットでは，1967 年にアブドゥル・ラザク副首相が訪問し，翌 68 年に政府資金により集会所が建設されている［小甘密新村五十周年紀年特刊 : 63］[12]。

本節の内容は整理すると，初期新村に与えられた自治権は，住民に合法的政治活動の機会を与えた。しかし，村長の目まぐるしい交代に見られるように，50 年代においては未だ新村の政治は安定的な中心を欠いており，全国政治やスレンバン市内の動向次第では，左派系野党が支持を得る余地が残されていた。とはいえ，62 年以降の村長委任制以降は，政府からの開発援助を背景に，むしろ MCA の主導権が制度化されることとなった。

5. おわりに

本稿では，スレンバン市近郊のラサ，シカマットという二つの新村に形成過程の再構成を試みた。イギリス当局の明確な方針が打ち出される前に新村が形成されたこの地域では，住民の置かれた環境は劣悪で，不満も相対的に高かったものと思われる。50 年代，住民には厳格な管理の一方で，選挙という形で合法的に村落内政治に関与する機会が与えられた。しかし，こうした背景の下での自治は村落内政治の安定をもたらさなかった。MCA の村落内における主導権が確立・制度化されるのは，村長が委任制になって以降のことなのであり，それはマレー人与党率いる政府の支持によって可能となった。

成立の契機におけるスレンバン有力者の関与や，60 年代初頭の選挙動向に象徴されるように，この 2 村の形成過程，村落内政治において，州都スレンバンに近接していることは大きく影響している。本稿で見てきたような歴史的経験は，著者らが調査した他の新村と必ずしも共通のものではない。2 村の立地条件に由来する特徴を明らかにするためにも，異なる条件の新村について考察する必要があるが，これついては別稿に譲りたい。

謝辞　聞取り調査の際，多数の現地の方に御協力頂いたが，特にスレンバン在住の陳慧螢さんには多方面において調査の便宜を計って頂いた。改めて感謝の意を表したい。

聞取り調査のインフォーマント・リスト

記号	村名	性別	生年	生業・役職など（調査当時）
RS1	Rasah	男性	1944	村長
RS2	Rasah	男性	1933	村落委員会財務担当
RS3	Rasah	男性	1927	元エステート労働者
SK1	Sikamat	男性	未詳	前村長，ヌグリスンビラン茶陽会館総務
SK2	Sikamat	男性	1921	元農業
SK3	Sikamat	男性	1930	元商業

※本文中では記号で示した。

史料
・マレーシア国立文書館所蔵の行政文書（記号はファイル番号）
“Rasah Resettlement Area”, State Chief Resettlement Officer, Negeri Sembilan［SCRO NS A/2/L 1951&52］
“Statistical Information concerning New Villages in the Federation of Malaya”, Selangor Secretariat［Sel. Sec 2496/52］

"Sikamat New Village", Secretary for Chinese Affaires, Negeri Sembilan［SCA NS 76/51］
"Projek Kemajuan di Kampung Bahru Sikamat", Setia Usaha Kerajaan, Negeri Sembilan［SUK NS 3318］

・新聞記事
「馬華新村改名亜沙新村」『星洲日報』（1992.06.22）
「亜沙新村辛酸涙下成長」『星洲日報』（1999.07.23）
「風情萬種各師各法亜沙新村風雲人物」『星洲日報』（1999.08.29）
「亜沙見証芙開埠史」『星洲日報』（2004.02.23）

・地方刊行物
『森美蘭州芙蓉小甘密村小甘密華小成立五十周年紀念千禧年特刊』（2000，引用時は「小甘密新村五十周年紀年特刊」と略記）
『芙蓉小甘密新村華文小学新校舎落成千人宴暨四十周年紀年特刊』（1990）
馬華公会『新村成立 50 周年紀念特刊』（1999）

参考文献
Loh Kok Wah, F. 1988. *Beyond the Tin Mines: Coolies, Squatters and New Villages in the Kinta Valley, Malaysia c. 1880-1980.* Singapore: Oxford University Press.
Nyce, R. 1973. *Chinese New Villages in Malaysia*. Singapore: Malaysian Sociological Research Institute.
Siaw, L.K.L. 1983. *Chinese Society in Rural Malaysia: A Local History of the Chinese in Titi, Jelebu*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
王琛发著・黎艾琳编. 2002.『惠州人與森美蘭』森美蘭恵州会館（檳城媒体〈http://penangmedia.com/cms/〉に転載されたものを閲覧）
華僑問題研究会編. 1950.『馬来亜華僑問題資料』聯合書店（北京）
謝詩堅. 2010.「林蒼祐的四段政治情」韓江電視新聞中心〈http://www.hctvnews.net/〉
潘婉明. 2004.『一個新村，一種華人？　－重建馬来（西）亜華人新村的集体回憶－』大将書局（吉隆坡）
林廷輝・方天養. 2005.『馬来西亜新村―邁向新旅程―』策略分析與政策研究所（吉隆坡）
林廷輝・宋婉瑩. 2000.『馬来西亜華人新村五十年』華社研究中心.（吉隆坡）

注

1　より詳細な先行研究整理については別稿に譲り，代表的なもののみ取り上げた。
2　ペラ州の 2 新村を取り上げた潘［2000］があるが，植民地時期以前からの地域社会史を踏まえていない点で，十分な検討がなされているとはいえない。
3　当局は，新村を（A）完全に新しく建設されたもの，（B）既存の集落が移転によって拡大したもの，（C）既存の集落を拡張したものの三つに分類しているが，ラサとシカマットはいずれも（A）に分類されている［Sel Sec 2496/1952］。
4　二つの新村では，ともに 2008 年 8 月，2010 年 3 月，9 月の 3 回の聞き取りを行った。インフォーマント・リストは末尾に挙げた。聞き取りは主に村井が標準中国語にて行った。
5　MCA はマラヤ共産党とは逆に，マラヤ連邦に対して肯定的な穏健派華人による組織であった。51 年にマレー人政党である統一マレー人国民組織（UMNO）と連盟（Alliance）を結成し，55 年の

総選挙による勝利の結果，独立後の与党連合の一翼を担うこととなる。

6　住民の民族構成では，シカマットには 20 世帯ほどのインド人が含まれている（表②）。

7　シカマットでは，1952 年 8 月 16 日に米と砂糖は村内の指定の店で購入するようにという告知が出された。店は週 1 回しか開かず，営業時間も限定されていた［SCA NS 76/51］。

8　シカマットでは，1976 年に村内の成人男子の村の巡回による治安維持を目的とする「睦隣中心」が設立されており，70 年代でもまだ治安維持が重要な課題であったことがうかがえる。これは 86 年まで続き，それ以降は村落委員会が治安維持の責任を負うこととなった［小甘密新村五十周年紀年特刊 : 63］。

9　新村における地方評議会は，徴税や学校の運営，公共事業などの権限を持っていた［Nyce 1973：136–141］。

10　シカマットでは選挙の際に名簿が作成された。住民は IC 番号，居住歴とともに登録されており，当局が新村の住民を厳格に把握していたことがわかる［SCA NS 76/51］。

11　行政文書に，村の小学校の理事長を兼ねていた 2 代目村長が，学校への寄付金を使い込んだという記録がある。報告では，村長は不人気であり，村民の協力を得るためには彼を排除すべきと主張されている［SCA NS 76/51］。

12　これを機に，集会所の建設，道路の舗装や学校の改築など多くのプロジェクトが立案され，14,000 ドルが支出された［SUK NS 3318］。

表②スレンバン郡における新村

	成立年	形態※	成立時人口	1952 年当時の民族別世帯数				1952 年当時の職業比（%）				
				華人	マレー人	インド人	その他	農業	ゴム	錫	商店主	その他
パロイ（Paroi）	1950	A	546	175	0	0	0	5	40	40	5	10
シカマット（Sikamat）	1950	A	895	156	0	21	0	70	15	5	5	10
ラハン（Rahang）	1952	A	2030	367	0	0	0	20	15	0	15	45
マンバウ（Mambau）	1950	A	1404	255	0	0	0	4	75	0	1	20
ラブ・ロード 8 マイル（8th mile Labu Road）	1950	A	576	131	0	3	0	22	55	0	21	2
パンタイ（Pantai）	1951	B	1231	48	219	5	6	25	40	0	8	27
パジャム（Pajam）	1951	C	1054	172	1	3	0	60	30	1	6	3
マンティン（Mantin）	1952	C	84	172	0	0	0	50	40	2	1	7
ウル・ブラン（Ulu Berang）	1950	C	460	78	5	2	0	10	70	0	20	0
ニライ（Nilai）	1952	C	938	175	0	2	0	11	83	0	2	4
ラサ（Rasah）	1951	A	1910	357	0	0	0	12	55	5	3	25

出典：Sel.Sec 2496/52，林・宋 2000 の情報を基に作成
※形態分類に関しては，本文注 3 を参照。